

第3章 特徴的な町並みと歴史

大 高



御田植祭で田植をする中学生早乙女 昭和54年

大高の歴史は古く、『古事記』に東国征伐を終えた日本武尊が、宮簀媛命を妻にし、仲むつまじく暮らしたという「氷上の里」の記述があります。宮簀媛命が日本武尊から預かった草薙の剣を、大切にまつろうと社を造りました。この社が熱田に移され熱田神宮になりました。そして、

宮簀媛命の住まいの跡に氷上姉子神社が創建されました。またその近くには、日本武尊が波の音で目覚めたという逸話から、「寝覚の里」として石碑が建てられています。この地域の祭礼は、3月の太々神楽や6月の御田植祭など、氷上姉子神社のものを中心としてさまざまな祭りが行われています。

大高には神話の時代から続く史跡が残っていますが、桶狭間の戦いで歴史に登場した場所もあります。松平元康（徳川家康）が今川義元の軍勢に属し、敵前で兵糧を運び込んだ大高城跡や、織田信長によって築かれた鷺津砦や丸根砦の跡があり、これらはいずれも昭和13（1938）年に国指定の史跡となりました。その周辺の道路は細く、十字路がない構成になっており、城下町の特徴が現代まで残されています。

このような歴史の古い大高に、明治19（1886）年に武豊、熱田などとともに県内で最初の鉄道駅として大高駅が開業しました。高架化や新幹線工事などを経て現在の形になり、近年は区画整理が進み、南大高駅が完成しました。南大高駅の周辺では大規模商業施設や病院が建設され、住宅地の整備が進んでいます。



【メモ 酒蔵】

江戸時代に、二代尾張藩主・徳川光友の奨励によって、城下の酒造りが盛んになりました。主な産地は知多半島に集中し、江戸では灘酒と消費を二分するほどの人気を博したといわれています。現在ではほとんどなくなってし

まいましたが、大高には萬乗醸造・神の井酒造・山盛酒造の蔵元3軒が徒歩5分以内の地域に密集しています。これは東海地方では他に飛騨高山に例を見るくらいで、大変貴重な地域です。例年2月には、神の井酒造と山盛酒造が酒蔵を開放して見学や試飲ができる酒蔵開きがあり、多くの人でにぎわいます。

鳴 海

鳴海には縄文時代から多くの人々が生活しており、雷貝塚などの遺跡が点在しています。古くは鎌倉街道に沿った古鳴海、相原郷などの町が栄えていました。江戸時代となり、慶長6（1601）年に東海道が整備されたことによって、江戸から数えて40番目の宿場となりました。



絞の横断幕飾る鳴海宿場まつり

鳴海には、大名などが宿泊や休息に利用する本陣・脇本陣のほか、一般の旅人が宿泊する旅籠が作町、根古屋、本町に集まり、最も多かった天保時代（1830～44）には60軒以上の旅籠があったといわれています。

宿場の役割には物

資の輸送もあります。公の人馬の乗り換えを扱う問屋場が花井（西問屋場）と本町（東問屋場）の2カ所にあり、それぞれ鳴海の旧家がその職を担っていました。現在の町並みでは、古い部分はほとんどなくなりましたが、緑生涯学習センター東側でクランク状になった曲尺之手など、わずかに残った道の形などから歴史をしのぶことができます。

鳴海宿には法度などを民衆に周知する制札を設置するための高札場が、現在の本町交差点の角にありました。平成21（2009）年に庚申坂に復元され新しく書き写された5枚の高札が掲げられています。当時の高札は名古屋市博物館に保存展示されています。

鳴海には日本武尊にゆかりの神社があるほか、古くは室町時代に創建されたとされる寺院などが、現在も鳴海12ヶ寺として残っています。狭い範囲にこれだけ多くの寺院が密集している地域は珍しいとされます。鳴海城跡と円竜寺のある丘陵では古い瓦片が見つかり、鳴海廃寺が在ったとされていますが、昭和59（1984）年に円竜寺の本堂の建て替えに伴っ

て発掘調査が実施され、複弁蓮花門軒丸瓦や均整唐草文軒平瓦などが出土したほか、古墳時代から江戸時代までの遺物が多く発掘されました。また、松尾芭蕉が幾度も訪れたことでも知られています。貞享2（1685）年「野ざらし紀行」の旅の途中に訪れたのをはじめ、松尾芭蕉が生涯で4度鳴海を訪れています。その名残として千鳥塚、誓願寺の供養塔に芭蕉堂と芭蕉像ほか、成海神社境内游心亭、天神社に句碑があります。誓願寺の供養塔は芭蕉が没して最初に建てられた最古の供養塔として、千鳥塚は芭蕉存命中唯一でしかも文字が芭蕉の直筆という大変貴重なものとして、名古屋市指定史跡となっています。

この地域の祭礼として特徴的なのは10月の例大祭で、鳴海八幡宮と成海神社の神輿行列が町を回り、それぞれ表方5輦、裏方4輦の山車もにぎやかなお囃子に乗って町を曳き廻されます。表方と裏方に分かれて祭りを行いはじめたのは元禄年間（1688～1704）ころといわれています。それまでは、ひとつの祭りを楽しんでいたようです。近年は夜祭りで、鳴海にある山車9輦が庚申坂下の本町に、提灯を灯した華麗な姿で勢揃いし、訪れた人々を魅了しています。

有 松

有松は、慶長13（1608）年尾張藩によって村として開かれ、絞り産業が盛んになってからは、商工集落として成長しました。天明4（1784）年の大火で全村焼失という大きな被害が出たものの、藩からの援助などもあって復興をとげ、建造物には瓦葺や塗籠造、卯建など防火のための工夫を加えたことで、より重厚な印象の町並みが現出しました。



絞祭りでのぎやかな東海道

昭和44（1969）年ごろから、関係住民にも参加を呼びかけた町並み保存運動が見られるようになり、保存の機

運が盛り上がったことで、昭和59（1984）年、名古屋市で最初の町並み保存地区に指定されました。

有松の歴史的な建物の一つである中舂竹田家については、名古屋市によって、再生保存に必要な費用の一部にあてる『有松まちなみ保存ファンド募金』を地域住民とともに実施し、平成22（2010）年に再生保存を達成しました。東海道沿い町並みの無電柱化整備も進



有松東海道無電柱化全線竣工開通式

められ、中町交差点から松野根橋は平成23（2011）年度、中町交差点から国道302号東間は平成24（2012）年度に工事が完了し、平成25（2013）年3月23日に有松東海道無電柱化全線竣工開通式が開かれました。江戸時代の姿を思わせる、広い空の下に広がる町並みが見られるようになりました。現在も、住民によるさまざまな町並み保存活動が行われています。そのひとつは、国の重要伝統的建造物保存地区への選定を目指すものです。

この地域の特徴的な祭礼は、6月の第1土・日曜日に有松商工会や有松絞商工協同組合を中心に行われる有松絞りまつりがあります。絞り商人がそれぞれに店を出し呼び声を響かせるほか、絞り染め技術の実演や体験、町並みツアーなどさまざまなイベントで町がにぎわいます。また、有松には名古屋市文化財に指定される布袋車・唐子車・神功皇后車の3輦の山車があり、いずれも精巧なからくり人形が乗せられています。例年10月の第1日曜日に行われる天満社の祭礼では、この3輦の山車が町内をひきまわされ、幻想的な姿を見せます。



【メモ 絞り】

絞りの資料などを展示した有松・鳴海絞会館には、多くの観光客が訪れています。有松・鳴海絞りは、昭和49（1974）年に全国の各種伝統工芸品産業の保持振興のための、「伝統的工芸品の振興に関する法律」が施行され、昭和50（1975）年通商産業大臣より、愛知県下第1号として指定を受けました。長年にわたる技術改良により、国内はもとより広く海外にもその名を知られるようになりました。

有松・鳴海絞りは、慶長年間（1596～1615）以来370年の歴史をもつ伝統産業です。産地として形成されたのは、豊後絞の技法の伝播を契機に、東海道を往来する旅人を相手に成長をとげました。尾張藩の保護のもとに元禄年間（1688～1704）には、全盛時代を迎えています。

桶狭間

日本史の中でもよく知られている、織田信長と今川義元が戦った「桶狭間の戦い」の舞台は、名古屋市緑区と豊明市にまたがった地域です。永禄3（1560）年5月19日、大雨の中を信長が戦いを挑み、味方の10倍もの大軍を率いていた義元を破ったという話が有名です。勝利した信長が全国統一に向けて勢いをつけていったという点で、近世という時代の幕を開けた出来事ともいわれるようになりました。



桶狭間450年記念古戦場まつり

義元が信長に討たれたといわれている地は、桶狭間古戦場公園として整備されました。平成22（2010）年、桶狭間の戦いから450年の節目としてさまざまな催し物が企画された中で、進軍路を体感できるように古戦場公園をジオラマ化する改修や、多くの人からの寄付と協力で設置された信長と義元の二人の銅像「近世の曙」などが桶狭間の新たなシンボルとなりました。

桶狭間は戦いに敗れた南朝の武士が、この地の山間の洞のようなところに隠れ住み、世の中が平穏になってから村として開墾したのが始まりとされ、「洞迫間」と呼んでいましたが、低い丘に囲まれて桶のような地形から「桶迫間」となったともいわれています。なお、現在の「桶狭間」の地名は、明治11（1878）年の制度改正によってつけられたものです。

桶狭間の戦いのころは、約15～20戸、70～80人ほどの村であったのが、明治8（1875）年には80戸382人になり、耕地面積も終戦のころまで大きな変化はなかったといわれています。近年、区画整理事業が行われて住宅地が増えるとともに、町名変更が行われたことで昔ながらの地名がだんだん少なくなってきています。

この地域の特徴的な祭礼としては、5月19日に近い日曜に行われる桶狭間古戦場まつりがあります。古戦場公園、七ツ塚、戦評の松の前で供養が行われるほか、講演会やガイドツアーなどの催し物が企画されています。夜、大池のまわりに約3,500本のろうそくに灯をともし、戦死者を弔う万灯会は幻想的な風景をつくり上げています。

10月には、桶狭間神明社の祭礼があります。寛文10（1670）年ころから行われており、

有松に天満社が創立されるまでは有松の祭りでもありました。現在は、南町、中町、北町、西町の町内からそれぞれ傘鉾や獅子頭を連ねて神明社に向かって出発し、にぎやかなお囃子とともに無事を祈願しています。

徳 重



扇川沿いの桜並木

ここはもともと緑や水が多くある地域でした。農業用のため池の名残で現在も要池や神沢池などがあり、特に大池は緑区を代表する川である扇川が流れ始める池としてよく知られています。また、扇川周辺には、奈良・平安時代の窯跡が多くあるほか、市内では少なくなったさまざまな動植物が生息しています。

近年では、区画整理事業が進み、この地域は緑区の中でも有数の新興住宅地に整備されました。特に若い世代の人口増加が目立ち、平成20（2008）年4月には熊の前学区が新しく創設されました。平成22（2010）年5月には区役所支所、図書館、保健所分室、地区会館などが入った共同ビル「ユメリア徳重」が開かれ、東部地域の新しい行政ポイントとなりました。さらに平成23（2011）年3月には、野並駅で終点となっていた地下鉄桜通線の徳重駅までの延伸や、名古屋第二環状自動車道・国道302号線の開通もあり、区内の移動方法が大きく変わってきています。さらに、ユメリア徳重の隣には新しく商業施設を設けられて、人が集まりやすくなるような環境が整えられており、今後も開発が期待されている地域です。

大高銀座通り

平成21年



昭和40年ころ



昭和40年ころ



門田橋から鷺津山方面を望む

平成21年

昭和中期





氷上姉子神社参道

平成20年

昭和34年以前



大高川五月橋

昭和初期



平成21年



昭和40年

西大高から大高城・海岸寺を望む



明治後期



平成21年



大高小学校付近 昭和35年ころ

丸根砦からの展望

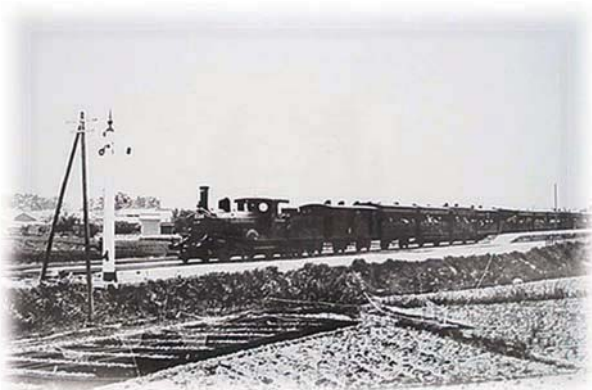
昭和中期



南大高駅付近 昭和前期



大高駅



明治19年プラットホーム1本の駅誕生



平成23年



名古屋・浜松間電化汽車電車並ぶ
昭和28年



昭和30年ころ

南大高駅 平成21年開業



駅に市バス乗り入れ
昭和53年



平成24年

花井交差点

昭和35年



昭和48年



平成25年



相原郷 道路拡張前

昭和48年

平成22年





浅間橋から鳴海駅

平成25年

平成7年



浅間橋から本町

平成7年

平成25年



相原通り

明治のころ



平成25年



昭和50年



中島橋・瑞泉寺

明治末期ころ

平成21年

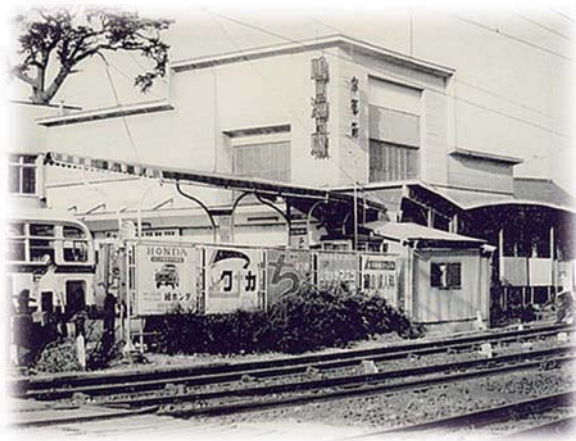


鳴海駅

昭和12年ころ



昭和50年ころ



平成24年



平部踏切

平成25年



昭和61年





有松常夜灯
昭和59年

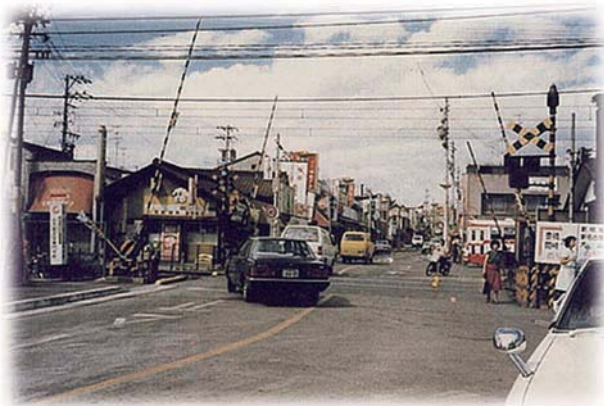
天満社境内に移設の常夜灯
平成24年



東海道の松
昭和55年

植樹された二代目松
平成25年





有松駅踏切
昭和60年ころ

平成25年



有松中学校円形校舎 昭和32年

駅南商店街

昭和60年ころ



平成10年



平成25年



有松郵便局

平成25年



平成10年



長福寺

昭和53年



昭和10年ころ



平成22年



桶狭間古戦場田楽坪

昭和54年

平成24年





庚申大祭

平成12年

郷前から大祭の幟を望遠

昭和62年



戦評の松

昭和56年

伊勢湾台風で枯れる



昭和初期

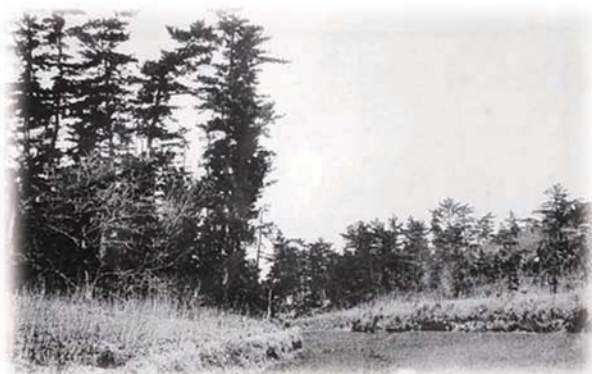


三代目 平成24年



郷前から南望む
平成14年

昭和30年ころ



武路狭間 昭和13年



七ッ塚 昭和40年代



阿刀山参道 昭和57年



田楽庵 昭和38年

徳重交差点

昭和62年



平成21年



平成25年



平手交差点

昭和61年

平成23年





滝の水公園

昭和60年

平成23年



籠山神社 昭和60年

平成24年

